

# 保育における性的マイノリティとクィア

——子どもと性をめぐる今日的課題——

永田麻詠

## 要約

今日、教育の場では性同一性障害を中心に、性的マイノリティと言われる子どもたちが可視化されはじめている。子どもと性をめぐる問題は、対応が急がれる教育の今日的課題である。こうした現状から本稿では幼児期に着目し、今日の保育の場では性的マイノリティをめぐってどのような課題があるのか考察を行った。その結果、今日の保育領域では、ジェンダー・フリー・パッシングからの批判を受ける形で、結果的には異性愛主義や男女二元論から脱出することが未だ実現できていない状況にあることが明らかになった。

キーワード：性的マイノリティ クィア ジェンダー セクシュアリティ 保育

## 1. 問題の所在

2006年、兵庫県播磨地域の小学校に通う性同一性障害の男児（当時7歳）に対し、当該小学校や教育委員会は、この児童を女児として受け入れることを認めた。また、2009年には埼玉県1の公立小学校において、性同一性障害を認める2年生の男児を女児として受け入れることにし、2010年には鹿児島県2の公立中学校において、性同一性障害と診断された1年生の女子生徒を男子生徒として受け入れる対応を取っている。

こうした事例を受けて、文部科学省は各都道府県教育委員会宛に、「児童生徒が抱える問題に対する教育相談の徹底について」という通知を2010年4月23日付で発出した。本通知には性同一性障害のある児童生徒に対し、「学級担任や管理職を始めとして、養護教諭、スクールカウンセラーなど教職員が協力して、保護者の意向にも配慮しつつ、児童生徒の実情を把握した上で相談に応じるとともに、必要に応じて関係医療機関とも連携するなど、児童生徒の心情に十分配慮した対応をお願いいたします」と記されている。

今、教育の場において性同一性障害を中心に、性的マイノリティと言われる子どもたちが可視化されはじめている。子どもと性をめぐる問題は、対応が急がれる教育の今日的課題と言える。ある調査3によれば、多くの性的マイノリティが就学前から小学校低学年にかけて、自らの性に違和を感じ始めるという。こうした実態をふまえ本稿では特に幼児期に焦点を当て、保育の場では性的マイノリティをめぐってどのような課題があるのか、クィアという概念に着目しつつ明らかにする。

なお、本稿では就学前における保育と幼児教育の両者を含め「保育」という語を用いる。

## 2. 性的マイノリティおよびクィアとは

性同一性障害（GID<sup>注2</sup>）も含め、異性愛主義や男女二元論には単純に括ることのできない人々が存在する。本稿ではその総称として「性的マイノリティ」を用いる。性的マイノリティには、同性愛者（レズビアン、ゲイ）や両性愛者（バイセクシュアル）、トランスジェンダー（トランスセクシュアルやトランスヴェスタイト、広義の意味では性同一性障害も含まれる<sup>注3</sup>）、半陰陽（インターセックス）などが含まれるが、自らの性がわからない人（クエスチョン）や、無性（Aセクシュアル）の人など、明確には線引きできないあらゆる非異性愛者、男女には二分できない者が存在している。

こうした明確には線引きできない性的マイノリティの紐帯として、近年、「クィア」という語が用いられるようになった。「クィア（queer）」とは、もともと「変態」や「おかま」などを意味する男性同性愛者の蔑称であったが、投げかけられる「クィア」に対し、当事者たちがそれを逆手にとってあえて「クィア」を名乗り、用いられるようになった語である。現在では「クィア」は、レズビアン／ゲイ・スタディーズやジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズムの考え方と近接した概念であり、性的マイノリティを含みこんだことばであると理解されている。

以上のことを前提に、保育における性的マイノリティをめぐる課題を考察していく。

## 3. 子どもと性に関する先行研究

保育という研究領域では、ジェンダーが取り上げられることはあっても、性的マイノリティが論じられることは非常に少ない。そうした現状の中で浅井春夫は、クィアという語を用いてはいないものの、保育とジェンダーに留まらず、幼児のセクシュアリティにもふみ込んだ論を展開している。

浅井は、からだ・性器の性（Sex）、性自認（Gender identity）、社会学的性（Gender-role／Gender-pattern）、性的指向（Sexual orientation）の4観点からセクシュアリティの多様性を指摘し、次のように述べる。

ジェンダーは、実際には性自認に大きな影響を与えますし、性器・からだへの認識を歪めることも少なくありません。さらに性的指向に対しても、とくに同性愛に対して抑圧のメッセージを与えることがあるのです。その意味でジェンダーは、セクシュアリティの根幹に位置づく要素であると考えられます。性器・からだの性、性自認、性的指向がいわば本人の性的発達の自然さの発現であるのに対して、その自然さをジェンダーは誘導・抑圧・制限する意識を形成する役割をもっているといえます。（浅井 2003:136）

そして浅井は、「幼児期から自己の性をどのように肯定的に受け容れていくのかを保育実践の問題意識としてもつことが必要」（浅井 2003:136）と主張し、「ジェンダー平等保育で大切にすべ

きことは、ちがいがあることにより不自由や不利益、不必要な境界を設けない、分断しないことが重要」(浅井 2007:107)とする。

また、ジェンダー平等保育の具体的な方法として浅井は、「ままごと」や「ごっこ遊び」の役割交換に意識的に挑戦することや、体力的な差が少ない年齢であることを考慮し、「一緒に楽しむ共生力をはぐくむ」(浅井 2003:142)ことを提案している。

浅井の論は「クィア」という語こそ用いないまでも、保育における性的マイノリティをまなざすものであり、加えて保育実践の具体的な方法をも提案する先見的な研究であると言えよう。ただし浅井の一連の研究は、現在使用されている保育所保育指針や幼稚園教育要領、小学校学習指導要領が示される以前になされたものであり、今日の保育における性的マイノリティをめぐる、どのような論が展開されているのかについては一定の留保が必要である。

#### 4. 今日の保育における性をめぐる課題

では、今日の保育では性的マイノリティをめぐる、どのように議論されているのだろうか。ここで確認していきたい。

保育所保育指針および幼稚園教育要領、小学校学習指導要領が改訂された 2008 年以降を見ると、保育における性的マイノリティや、クィアを論じた先行研究は管見の限りほとんど見られなかった。よって、近接した問題としてジェンダー・フリー保育など、保育におけるジェンダーに関する研究をここでは取り上げ、考察を深めていく。

2008 年以降、保育における性をめぐって積極的に研究を進めた識者の一人に、青野篤子がいる。青野は、保育者や保育施設を利用する保護者への調査を行い、ジェンダーの観点からどのような実態が見られるかを整理している。また、ジェンダーにとらわれた子どものふるまいに対して、保育者がより介入的な働きかけを行う重要性も指摘している(青野 2012)。青野の研究は、近年激しさを増したジェンダー・フリー・バッシングへの反論が基本的姿勢となっている。そのため、ジェンダー・フリー保育の必要性や重要性に関する主張が多い印象を受ける。その他にも、子どもがどのようにジェンダーを理解し形成しているのかに関する研究など(作野 2011)、2008 年以降の研究では保育におけるジェンダーを取り上げたものが大半であり、性的マイノリティについてはほとんど言及されていない。

今日の保育分野では、ジェンダー・フリーを「性差を否定したり、男らしさ、女らしさや男女の区別をなくして人間の中性化を目指すこと、また、家族やひな祭り等の伝統文化を否定する」(青野 2012:5) ことと考えるバッシング派からの不当な批判を受けながら、子どもがいかにジェンダーにとらわれているかを指摘することで、保育におけるジェンダーを取り上げる重要性を主張する研究が行われている。その研究には、トイレや更衣等の男女区分を撤廃し、生物学的な性差や個々人の希望を無視するわけではないという主張が含まれている。

しかしそのような主張は、個々人の希望を無視しないという姿勢を持ちつつも、同時にどうしても生物学的な性差を温存することとなる。積極的に述べているわけではなくても、結果的には

異性愛主義や男女二元論を強調しがちとなり、だからこそ性的マイノリティやクィアについては今日の保育でなかなか取り上げられないのではないだろうか。

ジェンダーをめぐる取り組みは、性的マイノリティにとっても無論有意義なものであり、今後も行われるべきである。ただし、浅井のようにセクシュアリティまで含むことなく、男性/女性という前提で今後の研究や取り組みが進められるならば、それはマジョリティのためのものという誤解は免れられない。

また本稿の起点となった、教育における性的マイノリティの可視化という今日的課題も、問題含みの一面を持つ。それは、「性的マイノリティ」とは言っても性同一性障害ばかりが語られる点である。「障害」と称される性同一性障害は教育的対象とされ、同性愛者や両性愛者、半陰陽者など、多くの性的マイノリティは教育/保育の場で後景化される。そこには、同性愛等は精神的病理や個人の嗜好などといった根強い偏見があり、周囲からの不当な扱いは「個人の責任」に帰されるのである。

以上今日の保育領域では、ジェンダー・フリー・バッシングからの批判を受ける形で、結果的には異性愛主義や男女二元論から脱出することが未だ実現できていない状況にある。浅井が取り組んだ、セクシュアリティをも含む「ジェンダー平等保育」は、今日後退しつつあると言わざるを得ないだろう。

## 5. クィア的観点を取り入れた保育を目指して

性同一性障害のみならず、性的マイノリティが可視化されるべき今日において、保育の場ではジェンダーに留まらない取り組みが必要となる。本稿では最後に、クィア的観点を取り入れた保育について提案したい。

現在高等教育の分野では、クィア・ペダゴジーが注目されつつある。クィア・ペダゴジーとは、学びの実践に潜む「普通・規範」を問う考え方と説明される（マリィ 2012）。性的マイノリティをまなざしつつ、私たちの性に潜む「普通・規範」を問う姿勢を、保育者に育むことがクィア的観点を取り入れた保育への一歩となる。

また浅井も述べていたように、さまざまな役割転換が可能である子どもの遊びを上手く利用し、「普通・規範」を攪乱する保育実践が可能となろう。そもそも子どもの中には、女の子の遊びに男の子が参加し、女の子が「家族ごっこ」で男の子の役割を演じるなど、「ジェンダーの境界を横断する子ども」が多く存在する（藤田 2005:65）。ジェンダーが形成される姿に注意を払いつつも、子どもの性的両義性を大切に保育実践を行い、「普通・規範」に束縛されない価値観を幼児期に育むことが重要である。

## 6. 今後の課題

本稿では幼児期に着目しつつ、今日の保育における性的マイノリティをめぐる課題を検討し

た。今後はクィアの観点を取り入れた保育について、保育内容や保育方法の具体化をより図っていきたい。また学童期や思春期などにも目を向け、教育と性をめぐる問題について考察を深めることを今後の課題とする。

【注】

- 1 岡山大学の実態調査では、「体は女性で心は男性（FTM）」の患者 407 人のうち 84%（342 人）が小学校低学年までに、「体は男性で心は女性（MTF）」の 254 人のうち 57%（147 人）が小学校高学年までに自分の性に違和感を自覚したとされている（2007 年 12 月 9 日・山陽新聞日刊より）。
- 2 Gender Identity Disorder の略。
- 3 トランスジェンダーとは自らの性に違和を感じ、既存の性役割にとらわれない形で生活をしつつも、こころと身体の性を一致させるための形成的手術は望まない人のことを指す。一方トランスセクシュアルはこころと身体の性の違和を強く感じ、一致させるための形成外科的手術を望む人のことである。トランスヴェスタイトは、医学的にはこころと身体の性の不一致はない上で異性装を行う人のことである。性同一性障害はトランスジェンダーやトランスセクシュアルと近接しているととらえられるが、同義ではない。

【主要引用参考文献】

- 青野篤子（2012）『ジェンダー・フリー保育一次世代育成のヒント』多賀出版
- 浅井春夫（2003）『子どもの権利と「保育の質」—保育問題最前線からの提起』かもがわ出版
- 浅井春夫（2005）『子どもの性的発達論【入門】—性教育の課題にチャレンジする試論 10 章』十月舎
- 浅井春夫（2007）『保育の底力—子どもを大切にするためのミニマム・エッセンス』新日本出版社
- 池田隆英（2011）「保育者の実践とジェンダー形成」小堀哲郎編『社会のなかの子どもと保育者』創成社、pp.81-96
- 作野友美（2011）「保育環境におけるジェンダー形成」住田正樹・武内清・長井聖二監修、長井聖二・神長美津子編『子ども社会シリーズ 2 幼児教育の世界』学文社、pp.96-109
- 藤田由美子（2005）「幼児期におけるジェンダー形成と子ども文化」望月重信ほか編『教育とジェンダー形成—葛藤・錯綜／主体性』ハーベスト社、pp.47-71
- マリィ, クレア（2012）「普通って何？—クィア・ペダゴジーを手がかりに」クィア学会第 5 回神戸大会シンポジウム発表資料
- 渡辺大輔（2012）「中学校における「多様な性」の授業での「学び」とは」クィア学会第 5 回神戸大会シンポジウム発表資料